教養講座

萬葉に於て日本的感情を見る（三）

東京女子高等師範學校教授　石井庄司

一、わらべ心（つゞき）

萬葉に於て日本的感情を見るといふ話の序説として、「わらべ心」といふことを取りあげて來ましたが、もう一回だけ、このことに就て申し上げます。そして次はいよ〳〵本筋の話に進みたいと思ひます。

これまで幾首かの歌に就て、わらべ心といふことが、萬葉の精神の重要な要素をなしてゐることを見てきたのでありますが、このことは、私が勝手に申し出したのではなく、すでに江戸時代の賀茂眞淵先生の繰りかへし言はれてきたことであります。

前にもあげました歌人柿本人麿が、石見の國から妻に別れて、京に上つて來るときに詠んだ歌といふのが、卷二に出て居ります。これは長歌二首で一つの對になつて居ります。その前の方の長歌の結末のところに

夏草の　思ひ萎えて　しぬぶらむ　妹が門見む　靡け此の山

といふのがあります。いとしい妻を國に殘して別れて來るのですから、非常につらかつたらしいのであります。それで振りかへり振りかへりして別れを惜しんできたのでありますが、山を越え里を越えて遠く來たのでもはやわが妻の住居も見えなかつた。夏草のしをれるやうに力を落して、自分のことを偲んでゐるであらうと思ふわが妻の家のほとりが見たいから、此の山よ、低くなれといふやうな意味であります。

此の結句に就て、賀茂眞淵先生は、かういつて居られます。

「故郷出てかへり見るほどの旅の情、誰もかくこそあれ。物の切なる時は、をさなき願ごとするを、それがまゝによめるにまことのまことなり。後世人は此の心を忘れて、巧みてのみ歌はよむからに、皆そらごとなりぬ」（萬葉考二）

仲々勝れた批評であります。殊に「物の切なる時は：」

とあるのは、實に適評であります。事柄の切迫したときには、人間はまるで子供のやうになる。そうして子供つぽい願事も出す。それをそのまゝに詠んだのが「まこと」であるといふのであります。「靡け此の山」といつたところで、岩や石の多い山が、風に草木の靡くやうに、低くなるわけのものではありません。子供の駄々つこのやうな、無理な幼稚な願事でありますが、それがそのまゝ表現されてゐるところが「まこと」であるといふのです。そしてそれが萬葉集の歌のよいところであるといふのであります。ところが後世の人はさういふことを忘れて、巧妙にのみ歌を作爲するから、皆僞事となつてしまふのである。——眞淵先生は、かう言つて居られるのでありますが、此の一言がもう萬葉集の全體にわたる大事な特色を言ひ盡くしてゐると思ひます。

春過ぎて夏來るらし白妙の衣ほしたり天の香具山

持統天皇の御製で、古今の絶唱であることは、皆よく承知して居ります。しかし此の御製の立派であるわけは、何處にあるかといふことになると、割合にわかつてゐないやうです。ところが、此の御製に就ても、賀茂眞淵先生は、實にしつかりした意見を述べて居られます。眞淵先生の萬葉考の意見を引いてみませう。

「夏の初めの頃、天皇埴安の堤の上なごに幸し給ふ時、かの家らに衣を懸けほして有るを見まして、げに夏の來たるらし、衣をほしたりと、見ますまに〳〵のたまへる御歌なり。さては餘りに事かろしと思ふ後世心より附そへごと多かれど皆わろし。いにしへの歌は言には風流なるも多かれど、心はただ打見打思ふがまゝにこそよめれ」

（萬葉考一）

要するに、持統天皇の御製の尊くありがたいところは、御覽あそばしたそのまゝを御詠みになつたところがよいので、後世の人の考で餘計なことをいふのはよくないといふことです。後世の人の考といふのは、例へば新古今集、或は小倉百人一首などで御存じの「春過ぎて夏來にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山」といふ御作のことなどを頭に入れて書かれたものでせう。この二つの御製は、どちらも同じだ、結局は違はないのだとお考へになる方があるかも知れませんが、歌を見るにはそんな粗らつぽい見方では駄目であります。一語々々が大事な役目をするのですから、詳しく味はつてみなくてはなりません。

まづ「夏來たるらし」と「夏來にけらし」では、大部違つてゐます。更に「衣ほしたり」と「衣ほすてふ」では大變な相違です。萬葉集の方では、御目の前に衣がほしてあるのでありますが、百人一首の方では「衣をほすといふことである……」とつづいてゐます。現實ではなく、こしらへ事であ

り、説明であります。萬葉集の歌のよいところは、説明やこしらへ事ではなくて、實際であります。嘘や僞でこしらへ上げたのでなく、眞實であり、誠であります。そのありのまゝをよむといふことであります。

ところで、春が過ぎて夏が來たといふやうなことは、大人の心持で、子供ではないといはれるかも知れません。しかしこゝはそんな外形の問題ではなくて、かやうな季節の變化といふことに就て、强く心を打たれて、驚くといふところ、それが、「わらべ心」であります。今日の一般の人は、血みどろな生活に疲れて、季節のうつりかはりといふやうなことには無頓着になり、神經が銷磨されてゐます。たゞ子供だけは、春がきたり、夏がきたりすることに鋭敏で感歎してゐるのであります。萬葉集にはかういふ季節に就ての鋭い作を多く載せて居ります。

次に萬葉集の表現の特色に就て、特に「わらべ心」のあらはれといふやうなものをみてみませう。

天の原ふりさけみれば大君の御壽は長く天足らしたり

これは天智天皇が御不例でいらせられた時、皇后の倭姫王の奉らせられた御歌であります。一首の大意は、天の原卽ち空を遠くふり仰いで見ますと、わが天皇の御壽命は、長く十分であるといふのであります。これは萬葉集の詞書に、天皇が御不例のとき、皇后のお詠みになつたものとあるから、かう解釋するので、さういふ歌の事情のわからないときには、別の解釋が起きるかも知れません。しかも此の御歌は、右のやうな御事情であれば「御壽は長く天足らしたり」は、一つの願望である筈であります。ところがそれを現實の情況として詠まれてゐる所に、ありがたいところがあると思ひます。しかしてそれは、「わらべ心」の尊さであります。

子供にとつては、願望や未來のことが、現在として表現せられることが多いと思ひます。例へば行儀の惡い子供にでも「〇〇さんは、お行儀がいゝですね」と云つてやれば、すぐよくなりませう。「〇〇さんは泣いてゐません」といへば、泣いてゐる子供も泣き止みます。此の御歌にはさういふ「わらべ心」の表現に通ずるものがあり、一層痛切なものがあるやうに思はれます。「天足らしなん」といつたやうな未來のことではなく現實の斷定として「天足らしたり」と表現せられてゐるのでありまして、それが無限の感情を傳へてゐる所以なのであります。「わらべ心」は決して弱いものではなく、非常に强く切迫したものがあるのであります。

次に萬葉集の想像性に就て考へてみませう。

天の川水陰草の秋風になびくを見れば時は來にけり

卷十の秋の七夕の歌の中にあつて、作者は未詳でありますが、柿本人麿集に出づとあり、恐らく人麿の作ではない

かと云はれてゐる作であります。一首の大意は、天の川の水のほとりに生えてゐる草が秋風になびいてゐるのを見ると、七夕樣の二つの星が一年に一度の逢ふ瀨をたのしむ時が來たといふのであります。この歌は七夕傳說を詠んだものであります。しかし私は、この歌には何か生氣があつて、單なる傳說を詠んだものではないと考へます。

「天の川」とありますのは、勿論天上界のことであります。しかし「水陰草の秋風になびくを見れば…」といふところは、全く川岸に生えてゐる草のそよ〳〵と秋風にそよいでゐる光景であります。これは單なる想像ではなく實景であると思ひます。しかし次の「時は來にけり」は再び天上の天の川の兩岸に於ける二星のことゝなるのであります。天上のことかと思ふと忽ちにして地上のことゝなり、また天上のことゝなるといふ具合に實に早い變り方であります。それが少しも不自然でないのであります。かういふことは、「わらべ心」に理解の深い方には何等不思議とすべきことではないと思はれます。

例へば子供に話をするときには、飛行機なども機械の詳しい說明などよりもトン、スーといつた方が一層飛行機らしいといふことはよく言はれることであります。トン、スーといへばまた降りることにもなります。まことに單純であります。しかしこれがわらべの心の世界のまことであり、また萬葉集の歌の世界でもあります。

この前にも申し上げました人麿の「天雲の雷の上に廬せるかも」といふのも、地上が忽ちにして天上となる例であります。それで强い感が出るのであります。かういふのは、人麿の詩的想像力の特異な點と考へます。人麿の長歌では神武天皇の時代のことでも、さながら現在のことのやうに詠まれてゐます。昔と今とが一枚になつた不思議な世界であります。それがとりも直さず「わらべ心」の國であります。そして愛國詩人としての人麿の强さでもあります。

萬葉集の歌の世界の根本的なところに、かういふ「わらべ心」といふものがあることをまづお話いたしまして、次に、萬葉に見る日本的感情の種々相に就て、申し述べてみたいと思ひます。

（この項終り）

兒童心理學は都合に依り本月は休載致します

編輯係